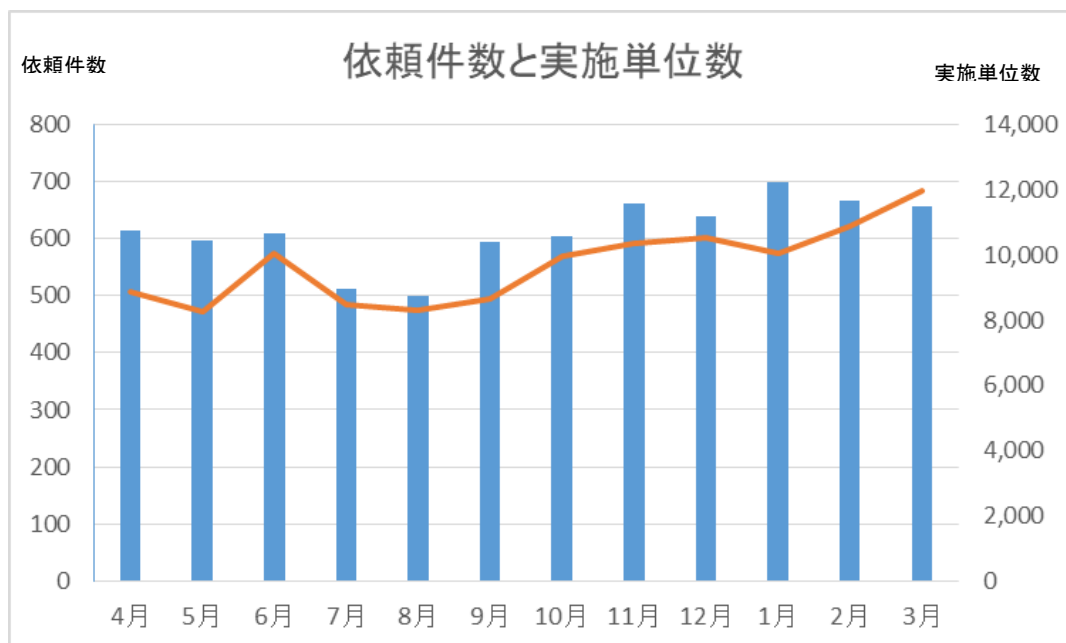


リハビリテーション科

リハビリテーション科は常勤医師 1 名、理学療法士 (PT) 27 名、作業療法士 (OT) 12 名、言語聴覚士 (ST) 7 名、マッサージ師 1 名、事務員 1 名体制でリハビリテーションに従事した。事務員の定着が悪く、医師や療法士が事務作業のため拘束されることが多々あった。

2023 年度世間では、新型コロナウイルス感染症対策が緩和されるも医業業界は引続きの対策が必要とされ身体的、精神的負担が前年度に引続き大きかった。

各診療科から 3 療法へのリハ依頼件数は 500~700 件/月、全体での取得単位数は、8,000~12,000 単位/月と変動が大きかった。新型コロナウイルス感染症に対する緊急事態宣言、入院患者数の減少、リハ対象者数の減少、提供リハ実施単位数の制限、リハスタッフの感染や濃厚接触者としての就業規制などが関与している。



<理学療法部門>

【中枢チーム】

中枢チームは PT6-7 名にて主に脳神経外科、脳神経内科の患者診療にあたった。主として脳卒中、脳腫瘍、頭部外傷、脊椎疾患の保存療法や手術療法に対する術前後のリハビリテーションや、パーキンソン病やパーキンソン症候群、その他神経難病などに対するリハビリテーションや、本態性振戦に対する FUS 治療前後の評価を、PT・OT・ST 間で連携をとりながら実施した。脳外科病棟・脳神経内科病棟にて行っているリハビカンファレンスでは、病棟スタッフとリハスタッフが患者様の目標を共有し、退院後の生活を見据えて、運動面だけでなく日常生活や高次脳機能障害に対しての介入も継続できている。教育・研鑽の機会として、院内の感染対策の緩和に伴い、週 1 回ケースカンファレンスや実技練習を実施している。また学会にて症例・研究報告を行い、院外のスタッフとの意見交換も行った。

【内部チーム】

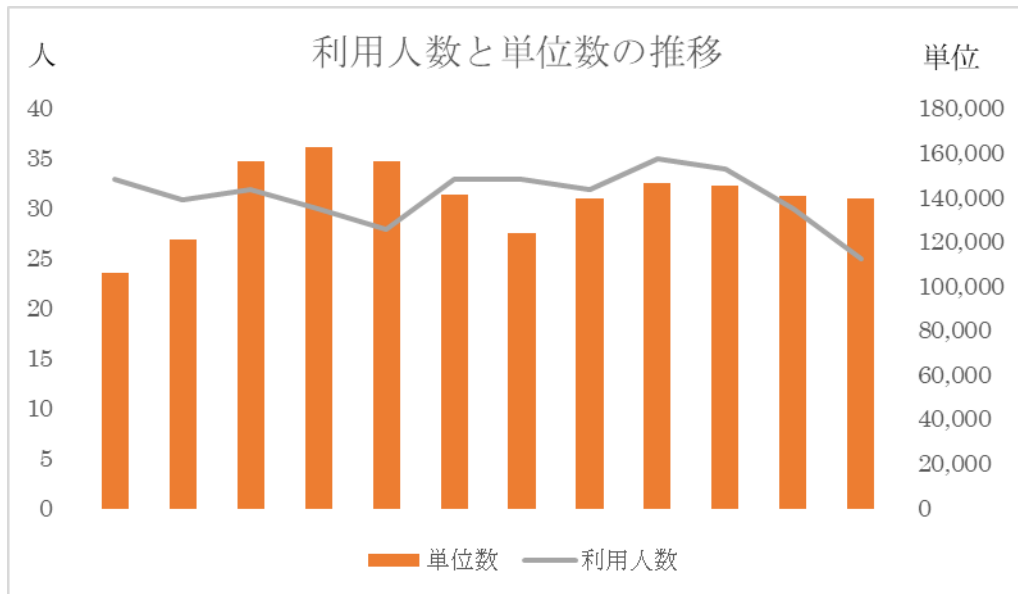
内科系では呼吸器・循環器・消化器・腎臓・血液内科を中心に、その他幅広い科から、廃用症候群の改善や予防を主な目的とした理学療法を実施した。コロナ病棟に関しては感染対策をはかりながら直接介入を開始し、入院中の身体機能維持に努めた。外科系では、消化器・呼吸器・心臓血管外科を中心に術前介入、ICU からの術後早期介入を実施した。離床難渋症例に関しては他職種とのカンファレンスを開催し、ADL 低下予防に努めた。COVID-19 による規制が緩和され、対面でのカンファレンスを再開し、多職種との連携をはかれるように取り組んだ。訪問チームと連携を取り、定期的に訪問リハビリテーション対象患者をピックアップし、退院後の ADL・生活を維持できるように支援・介入した。院外活動に関しては、学会発表や研修参加、論文執筆などを積極的に取り組んだ。科内のケースカンファレンス(1 回/週)では、様々な視点からアドバイスし、臨床に活かせるよう取り組んだ。

【整形チーム】

PT4-5名・マッサージ師1名にて診療にあたった。整形外科からは脊椎外科（頸椎、胸椎、腰椎）、関節外科（TKA、UKA、THA）、靱帯損傷（ACLや半月板の損傷・断裂）、各種外傷（脊椎、上下肢の骨折など）、腱板損傷・断裂後の術後症例を主な対象とし、医師と密に連携を図りながら術前後の評価、介入をおこなった。また病棟スタッフとは早期にADLの回復が得られるように日頃の関わり以外でも1回/週にリハビリカンファレンスを開始し、転倒リスクやADLの状況を共有し、転帰の相談をおこなうようにした。その他の診療科として、リウマチ膠原病内科（主に膠原病）、糖尿病内科（運動療法）、形成外科（切断など）、耳鼻科（頭頸部癌）の症例に対して理学療法の介入をおこなった。教育面としては1回/週のケースカンファレンスの中で治療技術の検討もおこない、知識面・技術面ともに研鑽にあたった。また、整形医師と共同でカンファレンスを1回/月に開催し、多角的な視点から症例に対して評価・介入方法の検討をおこなった。標準的な評価がおこなえるよう、学会参加やガイドラインを参考にまずは股関節・膝関節疾患に対するチャートを作成し、運用に向けて準備をおこなった。

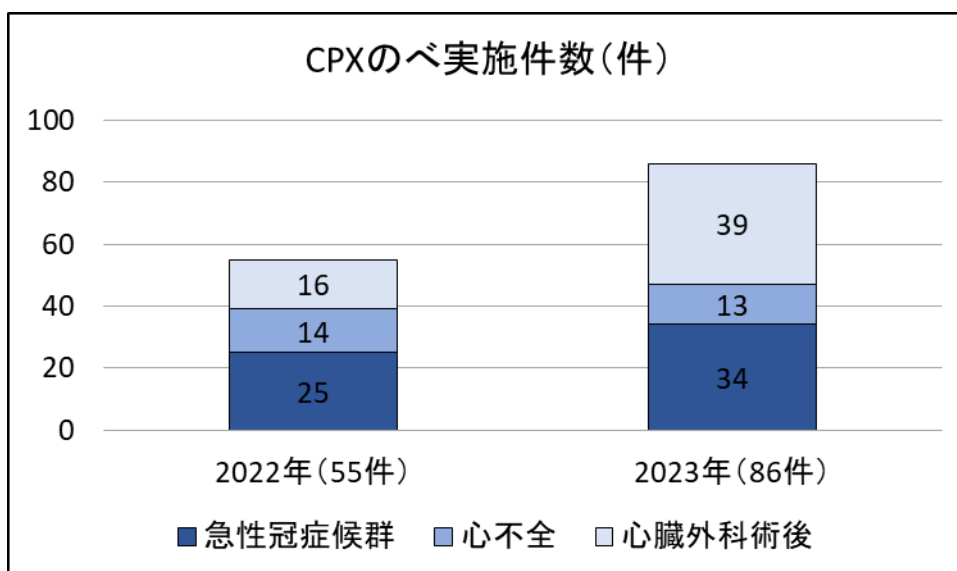
【訪問チーム】

訪問チームは PT3 名、OT1 名、ST1 名で活動している。1 月あたりの平均利用者数は 31 名、平均単位数は 140, 255 単位であった（図 1 参照）。疾患内訳は呼吸器 25%、循環器 18%、がん関連 14%、整形外科 12%、その他 31%、退院後の訪問リハ開始までは平均 3.0 日であった。前年度同様に北区・都島区を中心に、当院より約 5km 範囲を対象地域とし、退院後の早期の介入により、自宅生活を安心して過ごせるよう実施した。当院訪問リハ終了後には地域の周辺事業所と連携を積極的に行い、利用者のニーズに合わせた日常生活動作能力の維持・改善を目的に地域の各関連職種へ引き継ぎを実施した。教育活動においては、訪問スタッフの退職・産休により新たなスタッフへの業務引継や PT1 名、OT1 名のローテーター教育にも重点をおいて実施した。また、地域活動として、北区地域包括支援センターなどへ介護予防を目的とした自立支援会議や介護予防活動の講師活動にも積極的に参加した。



<心肺運動負荷試験>

心肺運動負荷試験（CPX）は理学療法士2名、医師1名で施行しており、主な対象は入院ならびに外来の循環器疾患患者である。急性冠症候群、心不全、心臓血管外科術前・術後患者に対して、運動耐容能の評価、運動処方や日常生活指導、息切れの鑑別、心筋虚血や心不全の重症度評価、運動療法の効果判定を目的として施行している。コロナ禍で一時、実施件数は減少したが、その後は徐々に増加傾向にある。2022年度より2023年度にかけて心臓外科術後患者を中心に外来心臓リハビリテーション件数が増加したことに伴い、全体の実施件数は増加した。CPX施行には医師立ち会いが必要となるため、循環器内科医師と協同しながら、実施件数の維持に努めていく必要がある。

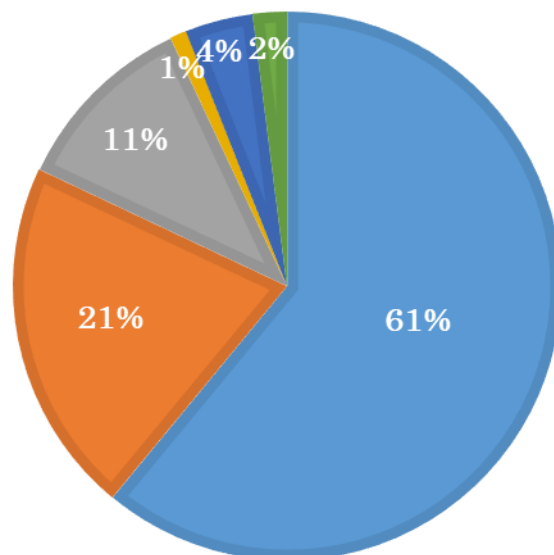


【作業療法部門】

作業療法は、OT12 名で脳神経外科・脳神経内科・整形外科・呼吸器内科を中心とした診療科の依頼を受けて診療業務を行っている。身の回りの動作だけでなく、家事・復職を含めた社会生活への復帰、また趣味的活動も踏まえて“その人らしい生活”を目指した関わりを行っている。身体機能や高次脳機能の回復と動作能力の向上を促すと同時に、病棟内での実際の食事場面での環境調整も実施。特にコロナ禍には実施できなかった入浴動作は、2023 年度より再開となり、酸素飽和度・呼吸の変化を確認しその場で直接的な動作指導を行う役割を担っていた。また、それらを病棟看護師に伝え日常の生活に繋げていけるように連携を行った。訪問リハでの OT の役割は、入院中に実施したことが退院後の自宅の生活に繋がるように、また入院中に予測し得なかったことに対応するなど入院から訪問への連携も図り個々の生活に寄り添いながら援助を行った。

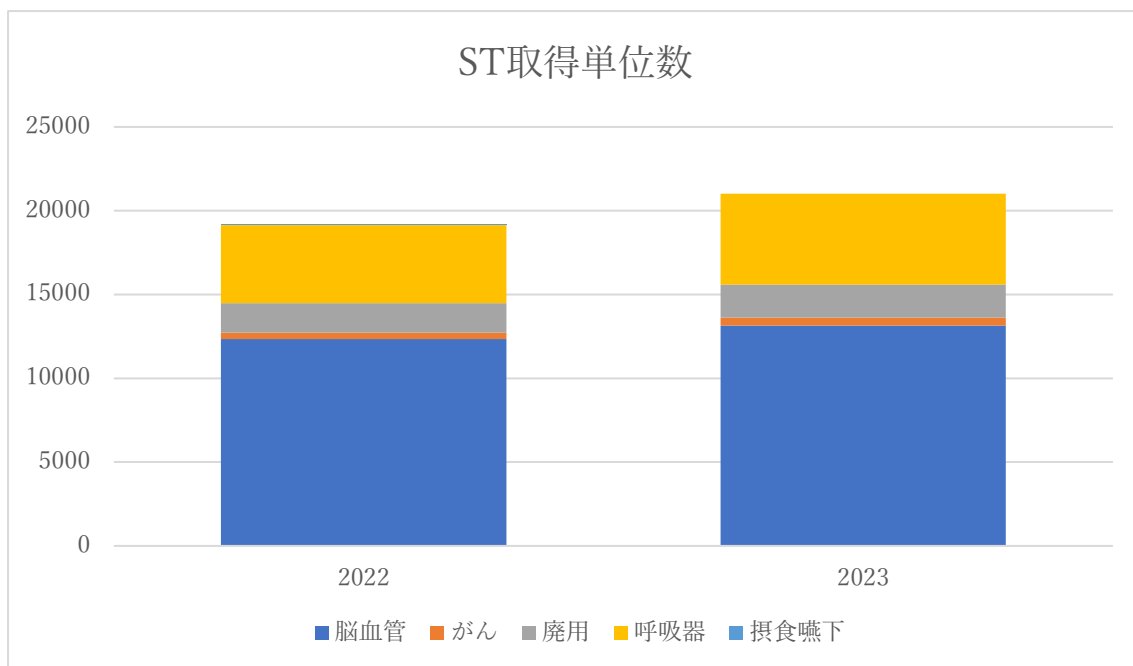
2023年度疾患別割合

■脳血管 ■運動器 ■呼吸 ■心大血管 ■廃用 ■がん



【言語療法部門】

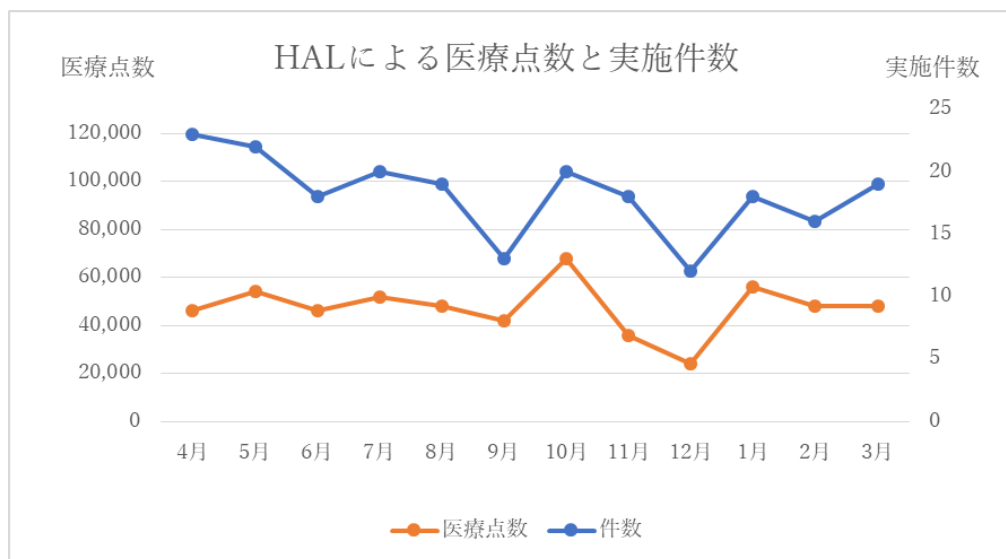
言語療法では ST6 名が在籍している。脳神経外科、脳神経内科を中心に高次脳機能障害、失語症、構音障害、音声障害などのコミュニケーション障害や摂食・嚥下障害に対してのリハビリテーションを実施している。呼吸器・循環器・消化器を中心に幅広い科からのオーダーに対応している。2023 年度は年間で 1619 件の依頼数を受けており、2022 年度に比し 180 件増となっている。嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査（耳鼻咽喉科での実施）での他覚的評価を行い、安全に嚥下訓練を進められる環境を整えている。成人だけでなく小児分野でも活動しており哺乳・離乳食の段階での嚥下評価、発達状況に応じてリハビリテーションを実施している。訪問リハビリ分野では、院内と訪問業務の兼任で活動しており、入院から地域につなげた介入を行っている。臨床業務に加えてNST、口腔嚥下リハビリテーション・緩和ケアチームにも所属し多職種との活動や病棟に対して摂食嚥下障害の勉強会開催にも取り組んでいる。



【ロボットスーツ HAL 部門】

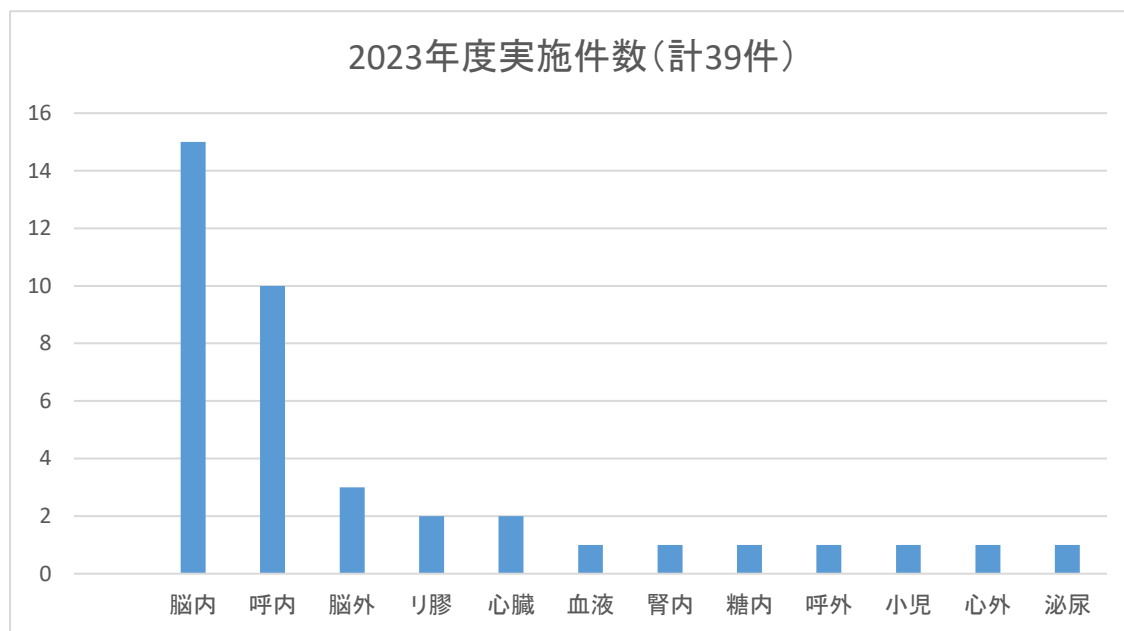
HAL に関するチーム体制は医師 1 名、PT8 名で、外来リハビリテーションとして実施している。リハ科ホームページには、HAL を実施している動画や、実際に HAL によるリハビリテーションを実施された患者様の感想などを掲載している。ホームページをみた患者様からの問い合わせの割合が増えてきている。近畿圏内において、入院で HAL を実施している施設や自費診療として HAL によるリハビリを実施している施設はあるが、保険診療下・外来リハビリのみを実施しているのは当院だけである。

HAL の診療実績としては、対象者人数：18 名（内新規 9 名）であり、昨年度より新規患者が 5 名増加した。年齢的にまだ就労期にある患者様は、外来での HAL 実施を希望される方が多く、当院での実施方法にマッチしていると考えられる。一人辺り、前後評価含め 1 クール 11 回、平均 18.1 回/月実施した。



【嚥下造影検査】

“食べる”ことは生活の質の向上にもつながり、患者様・ご家族の生きる希望となっている例は臨床で多々遭遇する。嚥下造影検査（VF）は患者様の現状の嚥下機能の把握・誤嚥の有無・食事形態の決定・代償嚥下の有効性を確認するために行う検査である。放射線科、栄養部の協力の下、毎週金曜日9:00から3枠でリハビリ医師1名、担当言語聴覚士(ST)1名が実施している。実施件数は年々増加傾向で2023年度は全46件実施し、主に脳神経内科、呼吸器内科からの依頼が多かった。検査結果は患者様・家族様に説明し主科への報告すること、経口摂取の開始、食事形態・環境の調整、誤嚥性肺炎の再燃予防、在宅復帰に向けて多職種と情報共有に還元をしている。



【研究課題】

- 1 慢性心不全患者のフレイル実態調査
(上坂建太、鶴本一寿、吉田 都)
- 2 心臓外科術後の要介護度悪化に関わる因子の検討
(上坂建太、吉田 都)
- 3 冠動脈疾患の二次予防のための病態コントロールを支援する遠隔ライフスタイル改善の研究
(上坂建太)
- 4 心不全患者における基本チェックリストと心不全再入院との関連の検討
(鶴本一寿、上坂健太)
- 5 振戦評価の妥当性について
(佐竹裕輝、辻本実奈美、甲斐太陽、脳神経外科医師)
- 6 訪問リハビリテーション介入と身体活動性との検討
(本田憲胤、富謙伸、野村知里、豊浦尊真、大洞佳代子)
- 7 新生児における四肢・体幹の筋厚・脂肪厚の検討
(本田憲胤、富 謙伸、亀山千尋、水本 洋、大洞佳代子)

- 8 デイケアにおけるサーキットトレーニングの身体機能に及ぼす効果に観察研究
(本田憲胤、矢木崇善、渡辺健太)
- 9 NICU 入院経験のある児の発達の特徴と関連因子の検討
(本田憲胤、富 謙信、澤田優子、成宮牧子、水本 洋)
- 10 労作時低酸素血症を呈する慢性呼吸不全患者における在宅酸素療法の酸素投与量適正評価
(浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子、北島尚昌、福井基成)
- 11 同種造血幹細胞移植患者における身体機能と栄養状態に関する後方視的研究
(徳元翔子、上坂建太、本田憲胤、大洞佳代子)
- 12 高齢心不全患者に対する退院後早期の訪問リハビリテーションの適応と効果に関する研究
(上坂建太)

【学会】

- 1 村司憲三朗、上坂建太、本田憲胤、大洞佳代子 急性心筋梗塞後の心不全合併により不安抑うつ傾向を認めた症例に対する自宅退院に向けた介入 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 2 鶴本一寿、上坂建太、本田憲胤、大洞佳代子、中根英策、猪子森明 繰り返す心不全患者の身体機能変化 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 3 三木陵平、野村知里、益尾洋児、吉田都、本田憲胤、大洞佳代子 呼吸と同調させた動作指導により労作時呼吸困難が軽減し、病棟 ADL 向上に繋がった、肺アスペルギルス症の一症例 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 4 河野風花、野村千里、中上和洋、浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子 訪問リハビリテーション導入により屋外活動の再開と疾病管理の定着を目指した呼吸器疾患患者 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 5 井上雅代、野村知里、富謙伸、本田憲胤、大洞佳代子 安定期 COPD 患者における栄養指標の関連 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 6 前田麻里、浦慎太郎、徳元翔子、本田憲胤 退院前後で身体活動量と連続 SpO2 モニタリングを用いて設定酸素流量の適性を判断した間質性肺炎の一症例 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 7 森田俊毅、辻本実奈美、佐竹裕輝、本田憲胤、大洞佳代子 右片麻痺を呈した左橋梗塞患者に対して院内歩行自立獲得を目指した症例 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 8 藤原裕貴、浦慎太郎、富謙伸、本田憲胤 気腫合併肺線維症による労作時低酸素血症に対して高濃度酸素投与下での運動療法を実施した 1 症例 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 9 富謙伸、本田憲胤、大洞佳代子 無気肺を呈した筋ジストロフィー患者に対して機械的咳嗽介助を導入した症例 第 35 回大阪府理学療法学術大会 2023/7/2(大阪)
- 10 上坂建太、鶴本一寿、本田憲胤、大洞佳代子、中根英策、猪子森明 高齢心不全患者に対する急性期病院退院後早期から開始した訪問リハビリテーション介入と予後との関連 第 29 回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 2023/7/15-16(神奈川)

- 1 1 鶴本一寿、上坂建太、本田憲胤、大洞佳代子、中根英策、猪子森明 心不全患者における KCL と再入院との関連の検討 第 29 回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 2023/7/15-16(神奈川)
- 1 2 浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子 パーキンソン病患者における身体機能と PhaseAngle, SkeletalMusclemassIndex との関連 第 21 回神経理学療法学会学術集会 2023/9/10-11(神奈川)
- 1 3 辻本実奈美、浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子 心原性脳塞栓症患者に対し、入院中に立位・歩行練習を実施できなかった要因の検討 第 21 回神経理学療法学会学術集会 2023/9/10-11(神奈川)
- 1 4 松岡森、大洞佳代子、本田憲胤 安全文化をつくる～アクシデント軽減に向けた当科の取り組み～ 第 18 回医療の質・安全学会学術集会 2023/11/25-26(兵庫)
- 1 5 富謙伸、本田憲胤、水本洋 新生児における横隔膜測定の信頼性の検討 第 33 回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 2023/12/1-1(宮城)
- 1 6 浦慎太郎、本田憲胤 24 時間 SpO2 モニタリングと身体活動量計を用いて、在宅酸素療法の効果を評価した一症例 第 33 回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 2023/12/1-2(宮城)
- 1 7 峰村幸宏、浦慎太郎、佐竹裕輝、益尾洋児、本田憲胤 延髄上衣腫摘出後に筋緊張異常を呈した症例-感覚入力を基盤とした介入により日常生活への上肢参加を目指して- 第 37 回大阪府作業療法学術大会 2023/12/10(大阪)
- 1 8 植田祥乃、野村知里、富謙伸浦、浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子 気胸の再発予防目的に動作指導を行うことで役割活動の再開に繋がった一症例 第 37 回大阪府作業療法学術大会 2023/12/10(大阪)
- 1 9 野村知里、富謙伸、浦慎太郎、本田憲胤、大洞佳代子 安定期 COPD 患者における位相角とその関連因子の検討 第 63 回近畿理学療法学術大会 2024/2/3-4(滋賀)
- 2 0 三木陵平、辻本実奈美、浦慎太郎、本田憲胤 重度意識障害患者に対し、抗重力肢位の髭剃り動作による体性感覚入力が移乗動作の介助量軽減に繋がった 1 例 第 63 回近畿理学療法学術大会 2024/2/3-4(滋賀)

【論文】

(原著論文)

- 1 松岡森*、大洞佳代子、本田憲胤 誤嚥・窒息リスク軽減への取り組み～アクシデント発生要因の分析とフローチャートの作成～ 医療の質・安全学会誌 2023 第 18 巻 3 号 P310-314 (査読有り)
- 2 鶴本一寿*、上坂建太*、本田憲胤、中根英策、猪子森明 心不全患者における基本チェックリストと運動耐容能との関連の検討 日本循環器理学療法学会誌 2023 第 2 巻 1 号 P11-22 原著 (査読有り)
- 3 浦慎太郎、...、北川孝* 脳卒中患者に対する長下肢装具の臨床使用-スコーピングレビュー- 総合理学療法学 2024 P1-12 doi: 10.50918/cptr.2024-007 研究論文 (査読有り)

(総説)

- 1 内田洋一朗、...、松岡森、山田信子、寺嶋宏明、.... 脾切除における周術期栄養・リハビリテーション治療 肝胆脾 2024 第 88 巻 1 号 P113-1202024 総説 (査読なし)

【出版】

- 1 片岡裕貴、北川孝、浦慎太郎(分担執筆) 明日から出来るエビデンス構築スコーピングレビューが短期間で読める・書ける本 p50、134、136、142 メジカルビュー社 2024 年発行